

高等教育における学習成果の評価（AHELO）
フイージビリティ・スタディ報告書

第1巻 - 設計と実施

要旨

この**第1巻**に続いて、データ分析と各国の体験を取り上げた**第2巻**が2月末に出される予定であり、(3月会合の会議記録を含めた) 詳しい知見を取り上げる**第3巻**（最終巻）が4月末に出される運びとなっている。

第1巻の全文は、AHELOのウェブサイト（www.oecd.org/edu/ahelo）に掲載されている。

<http://www.oecd.org/edu/skills-beyond-school/AHELOFSReportVolume1.pdf>

OECD

要旨

高等教育を取り巻く状況は複雑で絶え間なく変化しており規模も拡大していることを受けて、学力的に優れていることの尺度として各種のランキングが用いられており、教育と学習の実際の成果を効果的に測定する方策が必要なのは明白である。

OECD の「高等教育における学習成果の評価」(AHELO) が目指しているのは、過程修了時における学生の知識水準と技能について国際的規模で高等教育機関 (HEI) 側が評価できるツールを提供することである。このようなツールがあれば、高等教育機関の学生の学習成果を向上させる取組を支援していく上で重要な役割を果たすと思われる。

本件フィージビリティ・スタディは 2012 年の末に完了したものであるが、その実施目的は、多様性に富む国内事情、文化事情、言語事情、制度的事情においてこの種の評価が理論的・実務的に実施可能かどうか検証することにあつた。

本件フィージビリティ・スタディの実施目的に照らして選ばれた 3 項目 (一般的技能、経済学、工学) に関して、評価用質問票と状況調査票の策定作業に参加各国と国際的有識者団体が参加し、その後、参加教育機関に所属する学生に対して調査票が配布された。このテストの実施には、合計で 17 ヶ国・地域、高等教育機関 249 校が参画し、質問票の配布を受けた者は、教職員 4900 名弱、学生 (学部課程の修了が近い者) が約 23000 人である。

本件フィージビリティ・スタディ報告書の第 1 巻では、フィージビリティ・スタディに関する当初時点の展開プロセス (なぜ初期段階で必要と考えられたのかという理由、策定方法、克服しなければならない課題など) を検討するとともに、本件調査の実施状況についても検討する。

第 1 章 - AHELO を行う理由 - 21 世紀における高等教育の在り方

21 世紀において技能や人的資本が経済的繁栄や社会的福利の重要要素になるという認識が幅広く存在している。このような文脈で高等教育が重要な役割を果たしているのであり、国内的課題においてもその重要性が増している。

高等教育における世界的な傾向

いくつもの世界的な趨勢を受けて、過去半世紀にわたって高等教育で進展と盛衰が生じてきた。かつての高等教育は、エリートが在籍する伝統的研究系大学という「象牙の塔」モデルであると定義されていたが、現在の特徴としては、大幅な規模拡大と参加層の拡充、

新種の教育機関の出現（職業指向の民間事業者）、教育機関・教育課程・在籍生の多様化、コミュニケーションや教育技法の普及拡大と一体的運用、国際化の進展、競争とシグナル機能、コスト圧迫要因の増大と新種の資金調達が挙げられることに加え、成績、質、責任の所在が重視されるようになるなど、ガバナンスについて新しい手法や役割が生まれているという点が挙げられる。

質に関する課題と、質に関する情報格差を解消する取組の限界

1980年代初頭から OECD 加盟国の大半では質を保証する制度が整備されてきたにもかかわらず、高等教育制度が大幅に規模を拡大させ参加層も拡充していることを受けて、高等教育に入ってくる生徒の質や適性については、長期間にわたり懸念がする向きが見られる。2006年6月にアテネで開催された OECD 教育大臣会合において、高等教育の質を向上させていくという目標の達成に向けて加盟国が取り組んでいくことになった。

しかし、質保証制度が設けられ、業績指標が世界的規模で大幅に整備されていったにもかかわらず、高等教育の学習成果に関するデータが依然として希少なケースが数多く存在している。OECD の「高等教育テーマ別レビュー」では、この問題を軽減するとともに高等教育における学習成果の質に関する懸念に対処していくため、2008年には生徒側の学習成果を重視していくべきとの提言が行われている。

AHELO を行う理由

「高等教育における学習成果の評価」(AHELO) について、国際的規模で展開していく方向を目指すべきとの提案が 2006 年の OECD 教育大臣会合 (アテネ) で提起されたが、その当時、高等教育における成績の測定基準の質を高めていくべきとの声が強くなっていたという事情がある。この提案は、高等教育のパラダイムの変化を如実に示したものであり、具体的には下記の形で明らかになっている。

- ・ **ガバナンスに対する合議制アプローチを超越した対応** - 高等教育では、学者の集団による合議制ガバナンス方式から、自主性を高めつつ透明性と説明責任を強化したモデルへと、力点が移動している。この新しいパラダイムにより、教育機関側で成果の評価に関与すべきというニーズが強くなっている。
- ・ **学生の学習成果を重視する姿勢が強くなっている** - 別の傾向として、インプットよりも、高等教育段階の処理能力というアウトプット型概念に変化していることが挙げられる。この変化が最も如実に現れているのがボローニャ宣言であり、同宣言では、2010年までに欧州高等教育圏を構築し学習成果方式で高等教育課程の内容全般を明記するという目標が

要旨

掲げられている。ボローニャ宣言に合わせる形で自国の制度を整備していった国が多かったため、この傾向は世界的な趨勢になっている。

・ **教育学習プロセスとの関係で学生を中心に据えた学習・研修活動が重視されるようになっていく** - 世紀の変わり目の時点で、学部教育段階に関しては、「授業主体」から「学習主体」への変化が生じており、後者の場合、力点が置かれているのは手段ではなく目標である。このことの当然の帰結として、教育・学習の相互作用の理解が深められる。その意味において、成果の評価は、授業の実効性を評価する上で重要なのである。

・ **能力や学習成果に向けた広い意味での動きにおける AHELO の位置付け** - AHELO は、国境や言語、文化を超えて学習成果を測定しようとする初の国際的取組であるが、広い意味で捉えると各種の取組が成績や能力、学習成果を重視する方向に収斂しているという動きの一環でもある。具体的には、学習成果や成績との関係で間接的代理変数として機能するデータを収集する取組や、期待される学習成果の定義に力点を置く取組、学生の学習到達度を測定しようとする取組が挙げられる。

このような下敷きがあって、OECD の AHELO のお膳立てが形作られていった。実際問題として、学習成果は教育機関の業績の中でも重要な要因であるが、代理変数から間接的な証拠が得られる間は、国際的な測定に向けた質問票は整備されていない。AHELO によって、学生の成績を直接的に評価することで、この問題に対処できる可能性があり、今回のフィージビリティ・スタディの趣旨は、その可否を見極めることであるとされている。

第 2 章 - AHELO の開始 - 決定内容と課題

実行可能性を疑問視する - AHELO の企画立案と実行を可能にしていく上での主な課題

国際版 AHELO の展開を模索するという構想を受けて、高等教育界では 2006 年～2008 年に大々的な議論が行われた。この構想を強く支持してその企画立案に積極的に参加する政策担当者や有識者、関係者がいる一方で、このアプローチに批判的な立場をとって潜在的な危険性を指摘する者も見受けられた。

全体的に見て、懸念の主な内容は、下記の諸点である。

- ・ AHELO のデータが用いられるリスク
 - AHELO は OECD 加盟国内でのランキングのツールとして考えられたことは一度としてないにもかかわらず、AHELO のデータがランキングに用いられてしまう。
 - 公的資金を（再）配分する根拠として AHELO のデータが用いられてしまう。
 - 他の活動目的に悪影響を及ぼす形で、教育に対して高等教育機関内で資金を（再）

配分する根拠として AHELO のデータが用いられてしまう。

- ・ 存在意義や特性、学生層の面で教育機関の多様性が富んでいる中で、公平な比較を行うことが困難になっている。反対論者が強調している点として、教育機関や教職員が利用できる形で標準的テストから把握できる情報には限りがあり、単純化された結論になってしまう恐れがあることが挙げられる。
- ・ 教育機関の自治や学問の自由に悪影響が及ぶ可能性があり、AHELO が教育機関に強制されるようになり時間の経過とともに画一化が進行し学問の自由も抑制されてしまう恐れがある。
- ・ 世界各地で学問の伝統に差があり、学問領域とは独立した形で一般的技能を評価する可否について根本的な議論があることから、AHELO で一般的技能が重視されていることについて、長所や妥当性はあるのか。

有識者会合による予定表の作成

高等教育の特殊性に加え、高等教育レベルで学習成果を評価する企画立案作業に伴う課題を全面的に認識した上で、OECD では、2007 年全体を通じて国際的な有識者会合が 3 回にわたって召集され、AHELO 構想を前進させていく方法について提言を行うこととされた。有識者会合の様子は以下の通りである。

- ・ 高等教育の学習成果に関して国際比較が可能な形で指標を設けることは極めて困難であるが、達成不可能と考える者はいなかった。
- ・ 少なくとも初期の段階では教育機関レベルや学部レベルで学習成果の指標を設けるべきとの提言が行われた。
- ・ 有意な目標母集団として、3 年制または 4 年制の学位の修了時の学生に力点を置くべきであり、個々の学生のレベルでデータを報告してもほとんど意味がないことで意見が一致した。
- ・ 高等教育の成果がどのようなものであるべきかについては一般的に浸透した定義なるものが存在せず、本件フィージビリティ・スタディで対象となるのは、分野横断的な一段高い能力 1 項目と学問分野関連の能力 1 項目の計 2 項目とすべきであるという提言が行われた。
- ・ 本格的評価の実施は今回の初回プロジェクトの対象外である点が強調され、既存の評価結果を活用すべきであるとの提言があり、具体的には、高度の表面的妥当性があることから一般的技能項目に関する CLA のアプローチが挙げられる。
- ・ 科目特有の能力の評価も必要であることで意見が一致し、工学や経済学など方法論の中核部分が安定している学科領域のフィージビリティ・スタディを実施すべきである。

要旨

- 各国の多種多様なサンプルを活用するとともに、フィージビリティ・スタディに参加する教育機関には制限を設けるべきである。
- 本件フィージビリティ・スタディの目的は、AHELO が理論的に実施可能か否か検証することと、現実面で実施可能か否かを検証することの 2 点にすべきである。このような目的に鑑みれば、フィージビリティ・スタディの評価は、既存の質問票から構築するのも一案であろう。
- 本件フィージビリティ・スタディで対象となる国や言語の数は少なくとも 3 つとし、高等教育で望ましいとされる成果について国家横断的な合意形成を目指すことで意見が一致した。
- 評価についてはコンピューターを用いて実施すべきであり、個々の学生から見て時間は 2 時間にすべきであるとされた。有識者の見解では、本件フィージビリティ・スタディで判明する情報については、教育機関の参加意欲を喚起するものにすべきであるが、当初段階では学生側に参加意欲を持たせる方が難しいと考えられる。

その後、これらの知見や提言は、2008 年初頭に東京で開催された OECD 教育大臣非公式会合の場で紹介され、学習成果の評価に関する国際調査について、その実行可能性を評価するという OECD の取組に賛意を得られた。

第 3 章- フィージビリティ・スタディの設計と運営

調査の設計

AHELO のフィージビリティ・スタディについては、当初時点から研究課題として想定されたものであって、本格的な AHELO 調査の予備実験として考えられたものではない。このことは、調査の設計に大きく影響しており、具体的に述べれば下記の通りとなる。

- 新規のものを企画立案するのではなく、可能な限り既存のツールや質問票資料を活用することで、AHELO のコンセプトを裏付ける証拠の収集に注力する。このことから、本件フィージビリティ・スタディ用として選ばれた質問票は、今後実施予定の AHELO 本調査の質問票やツールについて予見を抱かせるものではない。
- 取組の内容については、敢えて複数の項目に分解して各種の学習成果を検討するとともに、各種の評価・検証手法も検討する。このように純粋に人為的なアプローチにしたことから、各種の方法論や評価領域について相対的な長所・短所について知見が得られると考えられる。
- 学問領域の選定の指針になっている。STEM（科学、技術、工学、数学）に比べ、社会科学では国際的評価の整備が大幅に困難になると考えられているため、STEM 領域

と社会科学領域から対照的な分野 2 項目に注力していくとの決定が下された。

本件フィージビリティ・スタディの設計の中身は 4 項目となっており、具体的には、3 領域（一般的技能、経済学、工学）それぞれにおける評価の実施と、研究の視点から分析対象となったプラス面（業績）の測定である。

本件フィージビリティ・スタディに参加したのは 17 ヶ国・地域であり、これら 3 分野の分布状況は、文化や言語の差を考慮に入れた上で、地理的、言語的、文化的背景のバランスが確保されるようになっている。

また、学習成果に関する合意形成の可否を評価する「Tuning-AHELO」プロジェクトや、前後事情の色彩が強いといった状況、関係者との意見聴取メカニズムの整備、各種教育機関との関係で AHELO が適切なものか否か精査するなど、関係者から寄せられた提言も取り込まれている。

評価項目 3 項目については、別々に実施されることになっているが、調査の構造上、プロセス、テストの実施、分析に関して一貫性を持たせる形で行って、各項目間の最大の相乗効果を得られるようにするとともに、事務連絡の合理化と規模の経済性の実現を図ることが想定されている。このような形で一貫性を確保するため、単一のコンソーシアムの下で評価項目 3 項目の取扱いが行われた。

調査設計に関する制約事項と影響

本件プロジェクトが実現可能であるということは、最先端に行く OECD の新規プロジェクトで広く見られるように、その財源は助成金と任意拠出金で充当するということになる。資金援助を確保するため、まず最初の方策は、本件フィージビリティ・スタディを進められるだけの OECD 加盟国の参加を得ることである。2008 年 12 月までに、本件調査への参加を表明しているのは 10 ヶ国である。しかし、本件プロジェクトの立ち上げ直後に世界的金融危機が生じたことから、民間財団や慈善基金に悪影響が及んでおり、資金調達活動の進行が妨げられている。そのため、参加国の取り決め内容を拡充するか改訂する必要性に迫られている。

本件フィージビリティ・スタディでは、参加国の継続的な参加と支援が望ましいが、資金調達上の問題点を踏まえ、調査の構造に手を加えなければならなくなった。OECD では、主な委託先 2 社に対して、調査目標を害することなく対価を引き下げよう交渉を行うとともに、参加国を増やして支援の多様化・拡充を図り、本件調査を進められるようにした。

要旨

加えて、プロジェクトの設計とスケジュールの改訂を行った。また、投入可能な財源に合わせて段階的に取組を実施することで意見が一致した。これにより、当初の想定よりも活動内容が限定されたとしても、取組の勢いを維持できるようにした。

取組の各段階

この取組は、3段階構成で進められた。

- ・ **初期段階での「概念実証」を示す。**手法としては、国際事情に即して暫定的な評価枠組・質問票を調整・企画立案し、参加国における小規模の検証作業を通じて、国内事情、言語、文化、制度的事情全般との関係で検証作業を行う。
- ・ **これらの質問票を現場で実施して、AHELOの理論的・実務的実行可能性を評価する。**その際には、テストの運用、学生側の回答の採点、データ分析、実行可能性の報告といった実務的側面に注力する。
- ・ **プラス面を把握するための方法論やアプローチを検討する。**つまり、入学時の学生の能力を基に調整を行った上で、学生の学習成果に対する教育機関の貢献度を把握する。実際問題として、本件フィージビリティ・スタディの委託目的は、学習による成長を測定できるか否かについて知見を得ることにある。

調査の運営と関係者

AHELO フィージビリティ・スタディを設計し実行していくには、参加国、国際コンソーシアム、OECD事務局の代表者相互間で連携していく必要があった。また、取組の実施に当たっては、各種の有識者団体や二次的関係者も参画している。

第4章 - 質問票の策定

AHELO フィージビリティ・スタディの質については、学生の学習成果の評価や各自が置かれた経歴の捕捉に用いられる質問票の質によって大きく左右される。

計測プロセス

文化事情や教育事情が複数存在するときに評価・調査用質問票を策定する場合、各種の活動を伴うのが通常であり、5段階に分類することが可能である。

- ・ **評価の枠組を策定して評価の目的を明確化するとともに、評価対象の明確化、使用す**

る設問内容の説明、テスト結果の解釈に関する基準を示す。既存資料の監査、国際的有識者グループによる枠組仕様の原案の検討、妥当性に関する各国の意見聴取、最終的な検討などのプロセスを経由して、「暫定的枠組」が策定された。一般的技能の枠組に関しては、迅速な処理手続が用いられた。

- ・ **評価用質問票を策定する。** 手法としては、枠組の仕様表に合った設問内容を新設・選定することになる。評価との関係で 2 種類の設問が起案された。具体的には、学生が独自の回答を行う自由回答形式の設問と、正しい回答を選択するという選択式の設問である。
- ・ **評価用質問票と調査内容を翻訳・翻案する**には、評価・調査用質問票をそれぞれの国で翻訳・翻案して、言語相互間で比較できるようにしなければならない。質保証と質運営に関する一連の手順も導入された。
- ・ 目標母集団に似た学生層向けに策定した設問を試験的に調査することで、**質問票の小規模検証を行う**。これにより、設問の質や妥当性を評価したり、質問票の長さ、難易度、関連性についてのフィードバックを収集できる。
- ・ **評価・調査用質問票を最終審査する**。その際、小規模実施した検証活動の結果、回答者から回収されたフィードバック、関係者と実施した意見聴取の内容を活用する。

一般的技能の評価

一般的技能の計測については、上記の通常策定プロセスに準拠していない。調査の構成は、既存の質問票を手直しすることが主旨であり、評価枠組の国際版を策定する作業は含まれていなかった。そのため、まず手を付けたのは、CLA (Collegiate Learning Assessment) の既存質問票の一部を手直しすることであった。

この自由回答形式の部分を補足するものとして、一般的技能に関する別の既存試験を活用する形で選択式の設問が設けられた。計測作業が進展していくにつれ、測定対象となる一般的技能については国際的な合意形成が存在しないように思われた。そのため、一般的技能の枠組は、その後になって着手されたが、時間的・予算的制約によって、一般的技能の有識者グループによる監督は実施不可能となった。

経済学と工学の評価

質問票の作成作業は、両分野とも似たものになった。経済学と工学の枠組は、「Tuning-AHELO」の枠組に加え、これら 2 分野における教育に関する背景資料を踏まえた内容になっており、経済学・工学関連の国際的有識者団体から双方とも承認を受けてい

要旨

る。テスト対象となる領域を明確化し、期待される学習成果を明記するとともに、能力測定に必要な器具類の概要を示すことで、十分に練られた枠組の諸要件は満たしている。数次にわたって意見聴取が実施された。

枠組について国際的な策定・検証作業を行うようことは、分野別の学習成果を国際的に明確化できるということになるが、この点は、本件調査の当初時点では明確とは言い難く、特に経済学に関してはその傾向が顕著であった。テスト策定担当者と有識者グループとが連携して評価用質問票が策定され、認識検査や討論会を介して検討が加えられた。定性的な検証は、それぞれの国における各種教育機関の学生フォーカスグループの手によって完了している。

状況調査

状況に関する枠組・調査用質問票の策定作業は、同様のプロセスを踏んでおり、本件調査の冒頭で、OECDによる取組を踏まえた形で行われている。学生や教職員、教育機関から背景情報を収集すべく、3種類の状況調査用の質問票が策定された。広範囲にわたる意見聴取が行われ、各種団体や個人の意見を求めた。また、設問内容の範囲や特徴について学生や教職員の意見を把握すべく、フォーカスグループの会合が開催された。

評価・調査用質問票のローカライズ（現地語化）

元となる質問票はすべて英語で作成されている。それぞれの現場で実施すべく、翻訳・翻案が必要となる評価・調査用質問票が多数存在していた。国際的調査で多く見られるように、使用される資料の現地語化については各国内拠点（National Center）がそれぞれ担当し、AHELO コンソーシアムは、プロセス全般を通じて指導と助言を行った。3種類の作業プロセスが用いられた。全体的に見て、評価用質問票は、2回にわたり翻訳、調整、検証作業を介する形で現地語化が行われたが（ただし、作業プロセスは2本立て）、一般的技能に関する選択式の設問と状況調査は、時間的制約のため翻訳作業は1回のみであった。

第5章 - 実施

AHELO 実施の現実面での実行可能性を評価するに当たり（つまり、参加者の選定、評価の実施、回答率、採点）、高等教育制度と任意参加の教育機関が大きな役割を果たした。

各国・各教育機関における AHELO の現場実施の運営

参加国側で自国のインフラを整備しなければならず、また、教育機関調整担当者やテスト運営担当者、採点責任者とも連携して、国内プロジェクトマネジャー（NPM）が国内拠点のいずれかが国内の AHELO 活動全般の調整を行った。事務連絡は、本件フィージビリティ・スタディを実際に行う際に重要な側面となった。AHELO の活動に関する所定の手続を説明する際、研修コースと取扱説明書も重要な役割を果たしていた。

現場実施に関するスケジュールは、比較的短期間であり、2012 年 1 月から 5 月までとされていた。全体的に見て、スケジュールを順守している国が大半であったが、一部の国内調査責任者から見て、学生の母集団を明確化したりサンプルを最終的に確定したり、インターン中の学生、試験中の学生、研究プロジェクトに従事している学生とテストのスケジュールを組む際に、この時間枠が設けられていることから問題も発生した。全般的に、組織の仕組みとしてはうまく機能した。

教育機関の選定と教育機関の参加確保

国内プロジェクトマネジャーに対しては、調査項目あたりで任意参加の教育機関 10 校の参加を得つつ、高等教育制度の多様性を反映する形で教育機関を組み合わせよう要請が行われた。国内拠点では、AHELO のプロモーションを行うウェブサイトなど、教育機関を募集するための教育機関参加戦略が幅広く策定された。国内プロジェクトマネジャーからの報告を見ると、参加要請を受けた教育機関からは本件調査への多大な関心が示され、辞退した教育機関はほぼ皆無であったという点が共通していた。

学生と教職員のサンプル抽出

各参加教育機関における学生の選定では、等確率の系統抽出法が用いられたが、学生数が 200 人未満の場合学生全員が対象とされた。この場合、各教育機関において、サンプル抽出枠全体を示す必要がある（学部課程 3～4 年次の終了時にある学生が目標母集団）。この作業は困難であることが判明している。なぜなら、高等教育との関係でサンプル抽出は広く用いられておらず、技術的基準を満たす形でサンプル抽出を行えたのは全体の 4 分の 3 にとどまったからである。

教職員の場合、教員 40 人を等確率の系統的に抽出する場合、その範囲に属する教員リスト（学部で教鞭を執っている者）から抽出しなければならない。教育機関側が当該範囲に属する教員の明確化に困難を感じているケースが多く、サンプル抽出情報を提出できた教

要旨

育機関はほぼ半数にとどまっていた。

電子的な配信

学生のテスト受験、データ収集、採点については、2種類のプラットフォーム（一つは、一般的技能の評価に関しては CLA のコンポーネントであり、もう一つはそれ以外の質問票に共通のもの）を介してすべてオンラインで実施された。これら双方のプラットフォーム相互間での検査が実施され、スムーズな移行が可能になっている。

2012年1月～7月にかけて、学生、教職員、教育機関調整担当者によって AHELO の試験システムが用いられた。テストに参加した学生数は約 23,000 人であった。教育機関の中には学生全員を対象として1回でテストを行ったところもあるが、20回に分けて実施したところもある。概して、テスト対象や部屋が大きくなると、学生 20 人以下の場合に比べ、調整面で困難の度合いが増していた。テストの実施については、円滑に進行したケースが大半であった。

回答率とインセンティブ

実地調査で主に問題となったのは、サンプル抽出された学生や教職員に調査やテストに参加してもらう形で確約を得たり意欲を喚起することであった。学生の回答率については、国や調査項目によって大きな差が見られ、工学と経済学の回答率の方が一般的技能に比べて高く、全数調査を行った教育機関の場合も同様の傾向が見られた。

高等教育機関側では、広報やマーケティング、インセンティブを伴う形で各種の学生募集方法に依存する形になっている。現金やクーポンが最も一般的なインセンティブであり、次いで、参加証明書、賞の授与、記念品贈呈、飲食物、成績優遇措置形式による学業面での特典の順になっている。教育機関の中には、AHELO への参加を学生に義務付けたところもあった。

全体的に見て、国内プロジェクトマネジャーからのフィードバックを見ると、物理的なインセンティブは学生の回答率を上昇させる上でそれほど(大幅に)役に立った訳ではなく、教育機関の校風や方策が極めて重要であることが見て取れる。学生の場合と同様に、教職員の回答率は工学で最も高かったが、この場合、全数調査が用いられたか否かは関係なかった。全体的に見て、国内プロジェクトマネジャーからのフィードバックを見ると、学生に比べ教職員の参加を得ることが大幅に容易であることが伺える。

学生の回答の採点

3 項目ある調査項目のそれぞれについて、質問票には、自動的に採点が行われる選択式の設問と、各国の採点担当者による手作業での採点が必要な自由回答式の設問の双方が盛り込まれていた。質の部分に関する採点は、結果の解釈の信頼性との関係で極めて重要であり、基準となる採点手続を厳守する必要がある。さらに、複数の言語、文化、国が関係してくる調査では、その傾向が顕著になる。採点マニュアル、項目別の採点指針、面談形式による採点責任者の研修がコンソーシアムによって提供された。一般的技能に関する学生側回答のすべてと各科目に関する 20%分については点数を 2 倍にして、採点担当者の所作を監視できるようにされていた。

第 6 章 - 設計と実施に関して得られた教訓

AHELO のフィージビリティ・スタディの趣旨は、高等教育において学習成果の改善を支える形で国際的調査を整備できるのか否かを明らかにすることであった。ここに至るまでに、AHELO の存在によって、高等教育の使命の中でも学習成果が重要であるという認識が形成されるようになり、現在では、高等教育の成績について論じる際に、学習成果が中心的な話題になる。また本件フィージビリティ・スタディによって、学習成果の測定に関して複雑な点や課題も多いことが明らかになっている。

AHELO の目的 - 学習成果の改善を支援する

本件フィージビリティ・スタディから得られた主な教訓として、AHELO の目的を明確化し、AHELO の内容のみならず、対象外の事項についても明確に伝達することが重要という点が挙げられる。今後の AHELO の展開を考えると、AHELO の趣旨が制度改善のツールである旨を改めて強調し、今後の質問票を通じて教育機関側で学習成果の改善に役立てられるようにすることが肝要である。そのためには、主な関係者の参加を得ることが極めて重要である。

フィージビリティ・スタディの設計

本件フィージビリティ・スタディの設計は、多様性に伴う課題に対処できる仕組みになっており、参加国が増えると、最終的な参加者は、当初の予定を上回る形で多様性が増していく。全体的に見て、このような多様性の存在は、本件フィージビリティ・スタディの彩りを増していく要因になる。幅広く有識者の力を結集して学習成果の定義を行い質問票を策定しようとする試みは、きちんと機能しており、概念実証も成功している。

要旨

本件フィージビリティ・スタディでは、分析の単位として教育機関を選定している。このアプローチが合理的であることは明らかであり、任意参加の教育機関も極めて前向きな姿勢であり、参加教育機関のフォローアップ調査を行うと、その参加を得る上でどのような側面やデータが最も役に立ったのか深く検討する際に役に立つと思われる。

本件フィージビリティ・スタディのプロセスでは、主な関係者から情報提供を求めることが重要であり、意見聴取プロセスの存在が有意義であることも確認されている。この種の意見聴取を行うことで有益な意見が集められるとともに、関係者の参画状況が大幅に強化され、今後の進展も強化されると思われる。

調査の設計は、3項目に人為的に区別するという方式が採用されている。いろいろな形で、学科項目の方が実施しやすいことが明らかになっている。ただし、今後、学科項目と一般的技能を対比させるというアプローチを導入した場合の利点については、各種教育機関との関係で学習成果をさらに検討するとともに、その結果を各教育機関が改善に向けてどのようにして役立てていきたいのかという点を検討する必要がある。

フィージビリティ・スタディの運営

助成に関する不確実性も、本件フィージビリティ・スタディの効果的運営に大きな影響を及ぼす重要要因であった。この経験から得られた主な教訓は、今後の進展に向けて事態を前進させていけるだけの参加国数と資金調達を早期に確保することが重要という点である。

本件調査の特徴は、AHELO コンソーシアムを設けて相乗効果の発生と専門的知見の強化を図ったことにある。全体的に見てこのアプローチはうまく機能したが、コンソーシアム内部にて関係者相互間で効果的な連携が図られることが前提になっているものの、このことは必ずしも容易なことではなかった。このことから、今後の契約は可能な限り明確で簡単な内容にして事務連絡の経路を明確化し、最も対象層が広い入札プロセスを用いることが重要であることが分かる。

質問票の策定

大きな問題となったのは、国内事情や国際環境が多様である中で、評価枠組について合意形成できることを示すことであった。学科項目ではこのプロセスが円滑に進行しており、AHELOの対象項目と測定内容についてその領域（経済学など）の有識者の間での合意形成が予想よりも容易であった。対照的に、一般的技能の枠組は、プロセスの後期段階にな

って初めて策定されたため、有識者の合意形成の範囲が限られたものとなった。この経験から得られた教訓は、評価枠組に関して国際的な合意形成を質問票策定プロセスの前提条件に位置付けるべきという点にある。これとは別の教訓として、その時点で合理的な方策と思われても、最終的に最もコストパフォーマンスが高いとは限らないという点がある。このことから、今後の AHELO に関しては、まったく新規の独自質問票を策定することが重要であることが明らかに分かる。

実地調査で明らかになったのは、教育機関側では学生に対して成績のフィードバックを行いたいと考えているという点であり、この場合、マトリクス・サンプリング（学生全員に対して設問への回答を求めないこと）の利用が不可能になる。マトリクス・サンプリングのプラス面と学生にフィードバックを提供できるようにすることのプラス面との兼ね合いについては、再検討する必要がある。

評価用質問票では、もれなく選択回答式の設問と自由回答形式の設問が併用されている。さらに別の教訓としては、学生と教職員にとってこれら双方のアプローチで相対的に魅力となるか詳しく検討するという点である。また、設問内容を最適なものにするには、教育機関や教職員が希望する結果情報の使用方法に密接に関連づける必要がある。最後に、今後、AHELO を進める場合には、前後事情に関する内容をきちんと整備しておくことが極めて重要になる。

現場での実施

全体的に見て、現場での実施作業は極めて成功裏に進行し、一部に問題は見られたものの、電子配信の利用は大きな成功を収めた。ただし、スケジュールについては、概して過渡に圧縮されており、今後 AHELO が行われる場合には期間を延長する必要性があり、各国の学期との整合性も向上させていく必要がある。

多数の国々や教育機関にとって、本件フィージビリティ・スタディに参加するということは、作業を実施していく構造やプロセスをまったく新規に設けるということである。今後に関しては、参加態勢が整備されているという基準が設けられ、得られた結果の信頼性を確保する上で必要となるシステムやメカニズムが参加者全員に具備されているか確認することも考えられる。この場合、外部の質管理機関から強力な支援を受けなければならない。

実施面での最大級の課題の一つとなったのは、サンプルを明確化することと、十分な水準の回答率を獲得することであった。この点に対処すべく提言が数多く寄せられており、回

要旨

答率を向上させる上で最も効果的な方策は何かという点で詳しく研究が必要であることは明白である。

教育・学習に関する思考

最後に、各国の意見を見ると、教育・学習に関して深く考察するようになったため本件フィージビリティ・スタディに参加して成果があったと考える国が多かった。この点は、おそらく本件フィージビリティ・スタディから得られた教訓の中で最も重要なものと思われる。つまり、高等教育の成果を評価すること自体が目的なのではなく、そのような評価を契機として、所期の学習成果やその達成に要する教授法について、これまでよりも深い会話が行われるのである。例としては、以下のものが挙げられる。

「学生側からは、自分の学習到達度に対し興味があったことから、AHELOに参加する意欲が湧いたとの報告が寄せられている」（スロバキア共和国）

「一般的技能に関しては、自由回答形式の設問になじみがないと回答した学生が大半だったが、その内容については興味深いものであり面白い（中略）と考えており、学習プロセスに取り込みたいという要望がある」（メキシコ）

「採点担当者向けの研修や採点の練習は、意外な体験（中略）となることが判明している。この練習は、能力の概念的枠組を明確に理解する上で役に立つものである。教育実務に関して批判的思考で臨めるようになる」（日本）

「学生に対して『エンジニアのように考えてもらう』という設問形式は、一部の教職員にとって目新しいものであり、学生に対する教育方法や、学生側の要望事項、その評価を行う方法について〔再〕検討する契機となった」（カナダ、オンタリオ州）

高等教育における学習成果の評価 (AHELO)
フィージビリティ・スタディ報告書

第2巻 - データ分析と各国の体験

要旨

この第2巻に続いて、(3月会合の会議記録を含めた) 詳しい知見を取り上げる第3巻(最終巻)が4月末に出される運びとなっている。

設計と実施を取り上げた第1巻は2012年12月に発表済みである。

第2巻の全文はAHELOのウェブサイト (www.oecd.org/edu/ahelo) に掲載されている。

<http://www.oecd.org/edu/skills-beyond-school/AHELOFSReportVolume2.pdf>

要旨

第7章・妥当性と信頼性

AHELO フィージビリティ・スタディのデータから得られる理論的実行可能性に関する知見

この章は、発表時点で入手できる情報に基づいて作成されたものである。ただし、情報の中には入手できなかったものもあるため、OECD が得た情報や分析内容については、OECD の内外で再現したり補完できなかった。また、心理試験の結果の中には入手できないものも存在したため、その関連の結論がこの報告書に盛り込まれているからといって、当該結論が OECD から支持を得ているということにならない。

AHELO を理論的に実行可能かどうかは、国や言語、文化、制度に左右されずに、妥当で信頼できる結果を出せるのかという点に左右される。この章では、使用された質問票の理論的可能性を評価するため、収集されたデータと実施された分析内容の概要を紹介する。これらの分析内容や結果は、本件フィージビリティ・スタディの「概念実証」の精神で解釈すべきである。

理論的実行可能性を評価するための妥当性・信頼性のコンセプト

妥当性とは、テストの得点の適切な解釈・使用を伴った広義の概念である。そのためには、テストの得点から導かれる目的と推論内容を当初から記載しておく必要がある。質問票の妥当性を評価するには、各種の妥当性を裏付ける証拠を幅広く取り揃える必要がある。

信頼性とは、テストの結果に一貫性があり、テストを実施した状況が異なってもテスト結果が安定的であることを言う。質問票の信頼度は、各種要因によって影響を受ける可能性がある。結果が安定している場合、学生の得点の観察値が本当の得点を反映している可能性が高くなる。従来の表現を用いると、質問票の信頼性とは、本当の分散（本当の能力）と分散の観察値（ランダム要因を含んだテスト得点の観察値）との比率のことを指す。

AHELO フィージビリティ・スタディの期間中に収集された理論的実行可能性関連の証拠

テストの設問内容を個別に見た場合、実際にはそれほど役に立たなかったことが判明するものもあり、この種の設問を除去しなければ妥当性や信頼性を評価できない。心理測定基準を満たしていない設問は、最終分析から削除されている。機能しなかった設問は、国をベースにして取り除くこともある。

一般的技能項目から削除された設問数が少なかったことから、設問内容の質が全般的に優れていたということが分かり、経済学と工学の質問票から削除された設問数も比較的少なかったことから、設問全般の質が十分な水準であったことが見て取れる。

国際的な調査では、各国間で設問の難易度を似たような水準にすることが極めて重要である。特異項目機能（DIF）分析が実施され、各種学生層の成績の差についての理解が深められた。大半の設問では、男女間で大きな差が見られなかった。大きな差が見られた設問に関しては、さらに分析を行って男女差が生じる根本的理由を把握する必要がある。各種高等教育機関の種別間での比較の基準として、教育機関の特徴 3 項目を用いている。その結果を見ると、比較の基準によっては、教育機関の種類により学生の成績に差が見られる。

- ・ 教育機関の規模（大、中、小）を用いると、学生の成績の差はほとんど見られない。
- ・ その教育機関から授与される最高学位（学士、修士、博士）を基準として比較を行ったとき、学生の成績に差が見られる。
- ・ 研究・教育（研究型、教育型、研究・教育バランス型）のいずれかに教育機関が力点を置いているのかを判断基準とすると、学生の成績に差が見られる。

一部の国では、想定通りに機能しなかった設問項目が多数見られた。このような形で国別の差が生じる根本的理由を把握するには、さらに分析を行う必要がある。一部の言語では、予想通りに機能しなかった設問項目が多数見られた。一般的技能項目の自由回答式の設問を見ると、言語相互間で学生の成績に大きな差が見られる。言語が異なると**学生**の成績に差が生じる根本的理由を把握するには、さらに分析を行う必要がある。

妥当性の証拠

使用された質問票の妥当性を判断すべく、本件フィージビリティ・スタディを通じて各種の証拠が収集された。

3 項目存在する評価用質問票を見ると、合理的な水準で構成概念妥当性が存在することが分かる。結果を見ると、全体規模については、補足的な規模の小区分に分けられる。

有識者の一致した意見として、経済学と工学の質問票の内容は妥当であるが、一般的技能の質問票に関しては内容の妥当性が十分に示されている訳ではない。一般的技能の認識検査から得られたフィードバックを見ると、学生から見て自由回答式の設問は関心をそそるものであったことが分かる。また、経済学と工学に関する自由回答式の設問原案に対しては、学生側から好意的な反応を得ている。内容の妥当性を詳しく確認するには、これら 2 科目の質問票の内容妥当性を確認できる証拠が必要である。

いくつかの指標を介して、表面的妥当性が評価されている。

- ・ AHELO の評価への回答に、学生側が十分に長い時間をかけている。無回答の水準が低かったため、質問票への回答に真剣に取り組んでいることが伺える。

要旨

- ・ AHELO の評価に対し、学生側がかなりの労力を投入している。また、一般的技能項目の参加学生を対象とした教育分野別の自己申告内容を見ると、分野横断的に見て分散の範囲が限られている。
- ・ 質問票の内容に関して、教育・職業との関連性についての学生側の認識は、調査項目相互間で差が見られ、教育分野相互間でもある程度の差があることが明らかになっている。併存的妥当性を示す基準として、2種類の指標が用いられている。
- ・ 結果を見ると、学生側の AHELO テストの得点と成績の自己申告との間に相関があるのは、工学科目のみである。AHELO の得点と自己申告内容との関係の強さは、国によって差が見られる。
- ・ AHELO の得点と学生側の教育満足度との関係の強さは、国によって差が見られる。

信頼性の証拠

本件フィージビリティ・スタディでは、質問票の信頼度は「可」から「良」のレベルである。国レベルで信頼性指標を検討すると、国によっては結果の信頼性が低くなっている。教育機関レベルで集計されたデータを用いて信頼性の分析を行うと、調査項目すべてにおいて信頼性の水準は「可」から「良」であることが分かる。教育機関レベルで集計されたデータを用いて信頼性指標を検討すると、国によっては信頼性が低いところも存在している。

自由回答式の設問項目に関して複数の採点担当者から得た信頼性の統計を見ると、3項目すべてにおいて「中程度」から「良」と考えられる。学生側の回答の採点は、国によって異なることもあるが、その序列は一貫性が極めて高い。学生側の回答の採点は、設問の合計点を考慮すると、各国間で一貫性が見られる。

一般的技能項目に関する設問の難易度と学生の能力レベルとの対応関係を見ると、質問票が学生母集団向けとして適切であることが分かる。学生の成績の分布状況を見ると、経済学と工学のテストは極めて難易度が高かったことが見て取れる。経済学と工学の自由回答式設問の場合に「ゼロ」点の割合が大きいことから、学生にとって難易度が極めて高かったことが分かる。

努力の影響を大きく受けたのは、複数選択式の設問よりも、自由回答式の設問の方であったように思われる。

結論

全体的な設問の質と機能

AHELO フィージビリティ・スタディで作成された設問は、うまく機能したものが多かった。

妥当性の全体的評価

3種類の質問票については、その構成概念妥当性は合理的水準に達している。また、収集さ

れた証拠を見ると、学科の質問票は妥当な水準の内容的妥当性に達しており、3科目すべてで表面的妥当性も合理的な水準に達している。併存的妥当性に関する証拠を見ると、そこまで確定的なことは言えない。

信頼性の全体的評価

3種類の質問票から出た結果は、信頼できるものである。複数の採点担当者相互間で見した場合の信頼性は、3項目すべてにおいて「中程度」から「良」と考えられる。

全体的な理論的実行可能性

AHELO フィージビリティ・スタディによって、諸国間、言語間、文化間、教育機関相互間で信頼性と妥当性を確保できる形で質問票を策定できることが分かる。

第8章 - 各国の体験

AHELO フィージビリティ・スタディに参加したのは17ヶ国・地域である。各国に対しては、その体験について熟考するよう当方から依頼を行っている。各国のフィードバックは、本件フィージビリティ・スタディ報告書の第8章に国別形式で示されている。各国から本報告書用に提出された部分の1ページ目は、AHELO フィージビリティ・スタディ会合に向けて作成されたポスターである。この種のポスターは、下記で再掲されている。

アブダビ

オーストラリア

ベルギー・フランダース政府

カナダ (オンタリオ州)

コロンビア

エジプト

フィンランド

イタリア

日本

韓国

クウェート

メキシコ

オランダ

ノルウェー

ロシア連邦

スロバキア共和国

要旨

米国

アブダビ

アブダビ

- 経済学
- 工学
- 一般的技能

知識基盤社会に脱皮するというアブダビのビジョンの成否は、国内の高等教育修了生の質によって大きく左右され、AHELO のフィージビリティ・スタディは、信頼性が高く多面的で国際的にも妥当な指標を用いて、その知識水準や技能水準を測定できるようにする促進剤である。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - スケジュールが短い。周知徹底や募集戦略の策定作業は2週間、関係者全員の動員は1ヶ月未満、国内インフラの整備は2週間未満で実施しなければならなかった。 - 技術的基準や運用指針、書類整備プロセスに関して、研修の実施は、諸外国の作業期間である2年間に合わせなければならない。 - 工学科目の対象学生の募集は、全数調査ベースで実施。 	<ul style="list-style-type: none"> - 評価の風土 国際レベルでの比較評価が促進され、アブダビにおける質保証制度に新しい側面が加えられた。 - 学習成果 - 世界各国の学生と比較する形でアブダビの学生の学習成果が測定され、各教育機関の責任者やリーダーに教育システムの状況について情報が提供された。 - 能力開発 - 将来的に類似の国内プロジェクトを主導・実行するという担当者の能力が育成されるとともに、国内レベルで類似の評価活動を導入する道が開かれた。 	<ul style="list-style-type: none"> - IC (教育機関調整担当者)、採点担当者、TA に関して選定基準が厳格だったため、プロジェクト活動を円滑に実施できた。 - 回答率が高かったことから、AHELO で想定される成果を説明する巧みな広報戦略の整備が重要であることが浮き彫りになった。 - 採点担当者の募集、研修、活動に投入する期間を延ばすべきである。 - (採点作業やリスク管理の面で) 国相互間の情報交換や協力関係については、すべての国々の参加を得る形で大規模プロセスとして制度化されると、プラスに作用すると思われる。

要旨

オーストラリア

オーストラリア

経済学

工学

一般的技能

AHELO に参加したことから、この種の国際的調査への参加にオーストラリアが打ってつけの国であることが判明している。なぜなら、各種関係者が参加に関心があり、実施面で制度が確立されているからである。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 学生側のやる気の喚起- 代表的なサンプルの確保- この調査から得られる主な成果は、構築されたプロセスに関するものであり、データではないことが浮き彫りになった。	<ul style="list-style-type: none">- 高等教育において学習成果に関する対話が始まり、その評価に用いるツールが示された。- 大規模オンライン評価の実施に関して各種教育機関の調整を行い連携関係を構築したこと。- 革新的な評価形式を通じて学生のやる気を喚起できたこと。	<ul style="list-style-type: none">- この種の評価に学生の参加を得ていく上で、長期にわたる企画立案活動が重要である。- オーストラリアの高等教育界には、意欲が極めて高く度量も広い人が存在する。- 現時点での情報、データ、成果の概要を提供することは、教育機関において関心とやる気を維持していく上で重要である。

主なメッセージ — 高等教育における質を評価し学習内容を向上させていく新種の方法について、その策定作業と実施面でオーストラリアが世界の第一線に立つことができ、誇りに思う。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書 第2巻

ベルギー・フランダース政府

ベルギー・フランダース政府

経済学

工学

一般的技能

AHELO フィージビリティ・スタディによって、高等教育の学習成果を評価する国際的テストが策定可能であることが明らかになった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 学生の参加意欲はそれほど強いものではなかった。教育機関の中には、参加できるだけの学生数を集められずプロジェクトを停止せざるを得なかったところもあった。テストについては、全数調査を用いなければならなかった。- 今回の調査は既存調査に上乘せする形式の別件評価として考えられていた。- 研究系大学に次いで、総合大学学部に参加するよう説得を行った。	<ul style="list-style-type: none">- 到達した学習成果を国際的に比較するための質問票の策定が可能であることが分かった。- この種の評価でやるべきこととやってはならないことを理解できた。	<ul style="list-style-type: none">- 学生や教員の間でこの種の評価に対してどのような抵抗が存在するのか把握する。- 自由回答形式の設問は最小限に抑えるべき。- サンプルを採取するのではなく、全数調査を用いた方がよい。

要旨

カナダ (オンタリオ州)

カナダ (オンタリオ州)

経済学

工学

一般的技能

AHELO への参加により、我が国の体験を通じて、また、世界各国の体験を通じて、学習成果の評価に関する理解が深められた。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 学生の募集は、教育機関から見て多大な時間と労力を要する深刻な課題だった。- 学生側の水準に関するデータが収集されることについて教育機関側が懸念を抱いていることから、学生サンプルの特徴に関して正確な情報を捕捉できなかったことになる。- 評価期間のタイミングは困難なものであった。なぜなら、学生の学習休暇時期であり最終レポートや最終試験の時期と重なったからである。	<ul style="list-style-type: none">- 比較がどのようなものになるのか知りたいと考えたため、参加資格がある教育機関 10 校のうち任意で参加した教育機関が 9 校を占めることとなり、教育機関側から積極姿勢が見られた。- 大学教員が本件プロジェクトに当事者意識をもって臨み、学生の募集にも支援を行った。学生の成績がどのようなものになるのか把握しなかったためである。- 採点担当者の声は、この評価が有意義なものであり、AHELO の参加経験によって今後の教育・評価方法が変わってくるというものだった。	<ul style="list-style-type: none">- 大学教員のうち有力者の参加を得ることが成功裏に進める上で重要である。- 週 1 回の頻度で教育機関の調整担当者の電話会議を行ったことが円滑にプロジェクトを進め支援の雰囲気醸成する上で有益であった。- 教育機関の事務当局との連携を極めて容易にすることは、実施作業全般を可能な限り成功裏に進めていく上で、有益と思われる。

主なメッセージ — 国際的な評価への参加は、実施・採点プロセスに関与した大学教員にとって特に価値あるものになった。自分たちのカリキュラムの構造や実施状況、用いている評価方法について反省する絶好の機会になった。最も重要な点として、大学教員側が自分たちの方法に疑問を抱き学生に求める内容について再評価するようになった。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書 第2巻

コロンビア

コロンビア

経済学

工学

一般的技能

AHELO フィージビリティ・スタディに参加したことは、コロンビアの各種高等教育関係者全員にとって極めて意義深いことであり、特に ICEFS（コロンビア教育評価研究所）にとっては有意義であった。重要な課題については対策が講じられ、その過程で有益な教訓を学び取れた。全体的に見て、高等教育の評価に関する技術的・実務的要件について最高レベルの議論に参加する絶好の機会となった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<p>- 出願を系統的に処理するとともに自由回答式設問を採点するという双方の意味で、スケジュールが短い。</p> <p>- SABER PRO と AHELO との関係を調査できるようにする形で出願制度を検討する。高等教育課程の修了生全員が修了テストを受験するというコロンビア独特の制度を踏まえれば、AHELO への参加によって、双方のテスト結果を比較できるようになるとともに、国内テスト用に収集されたデータを用いて AHELO のデータも補完できた。</p>	<p>- 参加する教育機関・学部を選定は問題なく進行し、働きかけを行った 26 教育課程のうち、本件評価への参加を決定したのは 25 課程であった。</p> <p>- 18 都市 26 ヶ所で学生約 4000 人が所要期間 1 日の評価を受けた。</p> <p>- 学生側の回答率が高かった。その主因は、AHELO の出願と SABER PRO の出願を連動させるという手法をとったためである。一般的技能の平均回答率は 95% で回答率の最低値は 91%、工学の平均値は 98% で最低値は 79% であった。</p>	<p>- 大学教員側の回答期限を長めに設ける。</p> <p>- 議論にもっと精力的に取り組んで、テストの設問や採点表に手を加える。</p>

主なメッセージ – AHELO と SABER PRO（社会経済的データを含む）、SABER 11（高等学校修了時の試験）から得られた結果を連動させると、高等教育の付加価値の指標を生み出せる可能性の見極めに役立つと思われる。独自で分析を行っているほか、ICFES としては、この種のデータを公表し研究者の中で関心がある者がいれば支援を提供していく所存である。

要旨

エジプト

エジプト

経済学

工学

一般的技能

胸おどる 1 月 25 日の革命を踏まえ、エジプト国民からは、さらに実効的な改革を求める要望が表明されるとともに、教育を含め生活の各種側面におけるサービスを質的に向上して欲しいとの希望も強くなっている。民主主義と透明性の新時代は、AHELO などの画期的な改革プロジェクトが目標としている自己評価や発展といったコンセプトに沿ったものである。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- エジプト社会全体を巻き込む急速で急進的な変化- 高等教育機関や理事会の首脳が頻繁に変わったため、本件プロジェクトの活動のスケジュールの運用も変わっていった。- エジプトの大学の規模が大きく（学部生 80,000～250,000 人）、電子的データベースが未整備	<ul style="list-style-type: none">- 学生（総数 4212 人）と教員（877 人）の回答率が高く、AHELO 参加者全体に占める割合は 18.3%（学生）、18.2%（教員）である。- 教育課程の所期の成果と労働市場とを連動させる重要性について、学会の意識が強くなった。- 参加大学で初めて同時に実施されたオンライン式テストであり成功を収めた。	<ul style="list-style-type: none">- 中央政府の参画と支援は、この種の大規模調査活動を成功裏に進める上で不可欠である。- 今後の調査で学生向けに参加募集を行う場合、革新的な方策が必要になる。- 研修目的により、また、不備の有無を確認し、その回避方法を模索するため、公表されたテスト問題を用いてテストのシミュレーションの実施を検討すべきである。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書 第2巻

フィンランド

フィンランド

経済学

工学

一般的技能

教職員、教育機関、政府から見れば、AHELO を通じて、高等教育のグローバル化時代において学生の学習活動をさらに促進するにはどのように教育活動を企画立案していくのかという点に関して、重要な情報が得られた。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - 国際的に不安定な金融事情 - フィンランド人学生の参加率が低い。このことにより、教育学習活動の企画立案面で高等教育機関を支援するという AHELO の全体的構想が害されている。 - 実施段階でスケジュールがタイトになる。 	<ul style="list-style-type: none"> - フィンランドの高等教育機関の間で AHELO に対する関心が高かった。 - 質問票の策定作業・実施は所定のスケジュールで完了した。 - 政府から確固とした支援があり、関連の国内団体も関与 	<ul style="list-style-type: none"> - プロジェクトの国際的資金調達については、開始前に財源の全額を確保しなければならない。 - 提携先全体などで構成される国際コンソーシアムについては、どの種類の質問票を策定するのか、AHELO などの大規模な国際比較プロジェクトをどのようにして実施するのかという点について、確固かつ一貫した理解をしていなければならない。 - 実施段階には、十分な期間を設けなければならない、学生のやる気の喚起、IC (教育機関調整担当者) の研修、テスト実行の企画準備には、長い時間が必要である。

主なメッセージ – AHELO の管理運営面での問題を回避するには、現実的な予算に立脚してプロジェクトの財源を全額確保しておくことが極めて重要である。こうしておけば、参加国が自国の活動の企画立案と財源確保を正確に行えるようになり、最終的にプロジェクトの一貫性が向上し管理も行いやすくなる。

要旨

イタリア

イタリア

- 経済学
- 工学
- 一般的技能

イタリアにおける AHELO フィージビリティ・スタディの実施は、プラス効果をもたらす体験であり成功裏に進められ、大学側から評価して欲しい旨の要望があり、AHELO のような試験は脅威ではなくチャンスと受け止められていることが明らかになっている。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 国際レベル・現地レベルで本件プロジェクトに参加した者全員にとって極めて時間がかかる活動であった。- フィージビリティ・スタディが実験としての性質を帯びているため、プロジェクトの実施段階で手順を変更しなければならないという事態が継続的に発生した。- 学生が統一テストを受験するという状態は、イタリアの風土では概して珍しいことである。	<ul style="list-style-type: none">- イタリアの高等教育制度において学習成果を評価する初の体験であった。- 試験全体の運用と現地の管理も成功裏に進んだ。このことは、大学の申し込み件数が多く参加学生数も多数に上ったことから見て取れる。- AHELO で検証された手法を踏まえて、国内レベルでフォローアップを実施	<ul style="list-style-type: none">- テスト実施中の IT サポートは、現地レベルで管理して、リアルタイムでトラブルシューティングを行えるようにする必要がある。- 今回の体験で、大学側から評価して欲しい旨の要望があり、AHELO のような試験は脅威ではなくチャンスと受け止められていることが明らかになっている。- 学術的内容を英語からイタリア語に翻訳する作業は、細心の注意を要する作業であり対応が難しい。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書・第2巻

日本

日本

経済学

工学

一般的技能

日本にとって、AHELO フィージビリティ・スタディは、工学系修了生に期待される知識内容や、知識基盤型グローバル社会において工学系修了生ができる事柄について、国際的な対話に参画する場となった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - 大学教員の参画 - 大学教員に教育活動・研究活動に費やす時間を削ってもらうには、それ相応の理由が必要になるとともに、大学教員に与えられるフィードバックの種類についても明確に説明しなければならない。 - 勢いの維持 - 企画立案期間が長期化したことにより、高等教育界の関心と参画を維持することが困難である。 - 実質的に同じ内容になるよう規格に従い質問票を翻訳する作業は、ある程度の柔軟性が必要であり、言語と当該科目に関する幅広い知識も必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> - 世界的に共有できる形で工学系能力と学習成果の概念的枠組を具体的かつ実質的な形で理解できた。 - 能力や学習成果を概念化したり測定するための具体的・革新的構想 - 国際的チームでの作業、世界の提携先からの学習、独自形式で貢献が可能であるという喜びの経験 	<ul style="list-style-type: none"> - 高等教育の学習成果に関する国際的評価は、教育関係者が自分の教育活動を世界的に比較して改める上で有益なツールになる。 - 学生がエンジニアとしての立場でどのように考えるかを測定するため、自由回答式の設問を起案するには、自由回答であることと正確であることとの間でバランスを確保しなければならない。 - 国際的な有識者集団が採点を行ったり採点指針を改訂することは、所期の学習成果の範囲と水準に関して合意形成に至る上で極めて重要になる。

主なメッセージ - 質問票や採点指針が参加教育機関に全面的に公開され、ワークショップも併せて実施してカリキュラムの企画に関する議論を誘発するとともに教育学習面での新機軸を促進できるようになれば、AHELO は、教育を改善していく上で強力なツールになると思われる。

要旨

韓国

韓国

経済学

工学

一般的技能

AHELO フィージビリティ・スタディは、高等教育での優位確立に向けた旅路に相当する。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 国内レベルと教育機関レベルで AHELO に投入する十分な予算の確保- 各高等教育機関において 50 種類を超える学科からランダムに学生を抽出して募集する。- 学生の回答の採点における質の確保 - 採点作業はテスト実施を成功裏に行う上で極めて重要であった。	<ul style="list-style-type: none">- 政府の支援をほぼ受けない状態で 50 種類を超える学科領域の学生と教員を盛り込む形でランダム抽出した代表的データ- KMOE、高等教育有識者、高等教育機関関係者の中で協力的ネットワークが構築された。- 目標、カリキュラム、教授法の問題など、現在の韓国の大学生向けの教育方法について、関係者の関心と問題意識を把握できた。	<ul style="list-style-type: none">- 高等教育の学習成果に関してこれまで以上に関連性の高いデータを求める声が強くなっており、特に一般的技能に関してその傾向が顕著である。- 実施プロセス全体にわたって専門家と協議すべきであり、参加プロセスに関しては事務連絡の機会を開くべきである。- AHELO プロジェクトへの参加を促すには、その他の形式の優遇策ではなく、権限付与が最良の選択肢の一つである。

主なメッセージ - 「詳しく、詳しく、詳しく」 - 「今後の調査」を成功裏に進めるとともに将来的に関係者の関心事項に資するため、目的、実施戦略、想定される成果、高等教育との関連性を含め、きめ細かく緻密な制度を設ける必要がある。

クウェート

クウェート

経済学

工学

一般的技能

クウェートにとって、AHELO フィージビリティ・スタディは、学生の学習姿勢や成功に対する国の責任と教育機関の責任を強化する国際的な取組であった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<p>- 成績課題の翻訳と文化を踏まえた手直し作業が難しかった。なぜなら、選ばれた設問集は米国式であり、アメリカ人以外の思考形態や書き方を評価するのに適切とは言えないからである。</p> <p>- クウェート国内チームとしては、受験レベルで国内の参加学生募集の面で困難があったものの、学生側の取組姿勢が高い水準であったため、本件質問票は学生の学習到達度の測定値として利用できると理解している。</p> <p>- 成績課題のオンライン・プラットフォーム - 評価がいつ終了したのか（例えば、各項目の終了時点）について学生側に混乱が生じた。そのため、評価プラットフォームについては、さらに開発が必要である。</p>	<p>下記に関する重要性やプラス効果について、重点を絞りつつも対象範囲を拡大した上で国内の教育機関の対話が開始された。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 評価指標の標準化 - 学生の学習内容に関する期待の国際化 - 教育機関の質、質の高い授業、質の高い学習内容を測定できる基準値の国際化 	<p>- 学生向け優遇策や参加状況に関して、これまでよりも包括的で統一され、学術情報を踏まえた計画が必要であり、テスト中に「現役」学生に参画してもらう方法を探す（強制評価、成績・単位と引き換えの評価）。</p> <p>- 実施課題の当初展開内容について、言語的ニュアンス、文化感覚、文化的感受性を正確に反映した上で国際的に通用するようにし、学生の学習成果の指標も国際化する。</p> <p>- 評価に関する国内風土 - 教育機関レベルで統一版評価内容をメインに据え、「評価の国内風土」を促進する。</p>

要旨

メキシコ

メキシコ

経済学

工学

一般的技能

幅広い多様性、持続的成長、主な課題を特徴とする高等教育において、新規に教育機関の知識を構築し評価能力を増強して改善を図る。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- メキシコ人学生の参加人数は、一般的技能が 2472 人、工学が 825 人、経済学が 541 人であり、回答率も極めて高く、それぞれ 75%、82%、80%であった。- 当局、メキシコ国内の高等教育機関 14 校の教員、学生から高い関心があり、参加人数は、教員が約 1000 人、科目別教育機関調整担当者、テスト管理者、採点担当者としての参加者は 150 名- メキシコの調整担当チーム (UASLP、UDG、UADY の主要 3 大学) の統合に加え、NPM、GNE 代表者、教育省関係者相互間で高度な連携、連絡体制、信頼関係 (特に、高等教育局 [Educación superior universitaria] がその後の助言と財政支援を提供)	<ul style="list-style-type: none">- メキシコの高等教育機関の間では、この評価アプローチは、意思決定を行い教育の質的改善を図る上で革新的なツールであると考えられている。なぜなら、インプットやプロセスが重視されているだけでなく、状況変数や国際的範囲といったアウトプットも重視されているからである。- 国際レベル、国内レベル、教育機関レベルの合議体での検討を踏まえて、評価枠組を深く検討するとともに、その複雑な方法論の意味合いについても深く検討する。- その目標を達成するには、複数分野の専門家 (教育担当者、個別分野の有識者、精神測定の関係者) の参加を得て、チームで活動することが重要である。	<ul style="list-style-type: none">- 参加のリズムを適切な水準に維持し、国際的作業部会との連絡を適切な水準に維持するとともに、これら 3 部門において質の高い基準を踏まえて技術的作業を実行する。- 自分の学習能力の評価への参加について (特に、自由回答式の部分)、学生のやる気を喚起 - この種のテストに学生側は慣れていなかったものの、理解していることが分かった。- AHELO フィージビリティ・スタディの結果が誤用されるのではないかという懸念に対処し、適切な予防策を講じる。

オランダ

オランダ

- 経済学
- 工学
- 一般的技能

経済学分野の AHELO フィージビリティ・スタディは、オランダにおける教育の質の測定方法という面で興味深い側面が加わることとなった。ただし、既に実施されている質の測定値（国際比較を想定したものは存在しない）に上乘せする形で企画準備することは困難を伴った。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - 周知活動と教員の参画はあったものの、優遇策を講じないままで高等教育機関や学生の参加を得ること。 - プロジェクトが不確実であったため極めて短期間のスケジュールで、また、他の活動で教員が多忙な時期に、国際評価が行われている。 - 経済学の評価内容をオランダの経済学カリキュラムとオランダの二元的システムに合わせて手を加えたこと 	<ul style="list-style-type: none"> - 実地研究分野においてオランダで2種類存在する高等教育制度が双方とも参加（研究系大学と応用科学系大学） - 極めて短いスケジュールだったにもかかわらず、集権的な運営・実施計画が設けられた。 	<ul style="list-style-type: none"> - 経済学部門における設問内容は、想定よりも知識を要する内容になっており、当初の経済学の枠組で示された経済学全体の範囲がカバーされていなかった。 - 二元的制度においては、評価用質問票の策定作業は、各種の経済学分野のニーズに対応すべきである。

要旨

ノルウェー

ノルウェー

経済学

工学

一般的技能

今回の調査により、高等教育の成果と一般的技能テストの活用方法について学習する機会を得られた。この種の取組では、学生と教員のやる気を喚起することが重要課題であることが判明した。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- 回答率 - 群を抜いて最も困難だったのは、十分な数の学生を募集することであり、回答率は想定を下回った。- 教育機関のリソースに対する需要が大きくなる - 採点作業が複雑で、調査に向けた募集・運営作業に手間暇がかかり、学生側に大幅な得点が必要（賞やギフト券）- タイミング - テスト期間が学期中に該当し、この時期には、キャンパスで過ごす時間が短く、各種プロジェクトや卒業論文に取り組んでいる学生が多い。	<ul style="list-style-type: none">- ノルウェーチームにおいて連携がうまく機能した。企画立案、技術的準備、教育機関相互連携、国内チームがうまく機能した。- 電子的テストを世界的規模で実施できることが判明した。些細な技術的問題が若干生じたことは別にして、テスト実施プロセスは円滑に進行した。- 各種の推進策や優遇策を試用した - 教育機関においては、学生向けに各種の周知策と募集策を講じている。	<ul style="list-style-type: none">- この種のテストに必要なプロセスや連携関係はうまく機能していたが、学生から見たときの費用便益バランスは、今後、慎重に検討する必要がある。- 教育機関側では、この種のテストに関心を示したが、本件に投入した時間やリソースは極めて多く、(回答率の関係から) 特に結果から分かった情報が限られていることを考えると、投入しなければならない時間やリソースが多すぎる。- この種の広範囲なテストを受けてみようというやる気を学生に起こさせる方法については明確な解決策は存在しない。対象を絞り込んだサンプル抽出法を行うと、ノルウェーでは現実的で効果的と思われる。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書 第2巻

ロシア連邦

ロシア連邦

経済学

工学

一般的技能

ロシア連邦では、AHELO フィージビリティ・スタディは、大学側（高等経済研究院がウラル連邦大学と連携）から発案され調整が行われた大規模なボトムアップ方式のプロジェクトであり、ロシア国内の各種大学の幅広い支援と熱心な参加を受けて完了したものであり、QA（質保証）での人脈形成と連携関係を強化する基盤となった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - テストの設問の性質 - 理論的な設問が主体であり、設問の量が限定的で不正行為のリスクが高い。 - サンプル採取を行うための学生や教員の個人データの収集が法的・実務的に難しい。 - 高等教育機関相互間でカリキュラムに差があり、細かい比較が困難。 	<ul style="list-style-type: none"> - 大学の参加規模が大々的であり、今回の国際的調査には地方大学も参画。学生、教員、大学当局からの支持が高い水準 - 学生の回答率が高い - 補足的に用いられる国内用質問票（学生と教員向けのオンライン質問票）を緻密化し、学習成果関連の追加データを得られるようになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> - テスト手順を順守させ不正行為のリスクを最小限に抑制するには独立の国内監督機関が必要である。 - 設問内容は、分量を多くして多様性も補強する必要があり、設問内容については現実の職業活動と連動させた方がよい。 - 高等教育機関は、国際的なガイドラインに沿って評価方針を整備できるが、その調整と事務連絡を担保するには、国内プロジェクト運営制度が必要になる。

主なメッセージ - AHELO プロジェクトは、高等教育における独立した質保証制度の創設に向けた質保証分野の国内的戦略目標に沿ったものであり、学士向け連邦試験（2012年以降）などの国内的取組を推進する効果がある。AHELO フィージビリティ・スタディは、国内的・国際的レベルで高等教育相当能力を測定する経験を積む機会であり、各種高等教育機関の教育の質を比較でき、同じレベルの国際的調査に連邦大学や地方大学が参加できるようになるとともに、各大学の学生の学習成果を単一の尺度で集計できた。

要旨

スロバキア共和国

スロバキア共和国

経済学

工学

一般的技能

スロバキアにとって、AHELO フィージビリティ・スタディは、国内の高等教育の質に関して終わりのない議論が続く中、トンネルの先に見える光のような存在である。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none">- AHELO プロジェクトに対する高等教育機関や学生の参加意欲を喚起する方法の模索- この種の経験、類似の規模のプロジェクト経験、高等教育機関における同じ程度の複雑さの経験が過去にない状態で、短期間で運営しなければならなかった。- 決定を下した時点で展開や結果が不透明なプロジェクトに比較的大きな資金投入するというリスクを負わなければならない。	<ul style="list-style-type: none">- 高等教育機関の参加が多く、学生のテスト参加も多く、場合によっては極めて高いケースも見受けられた。- 国際コンソーシアムが保証した方法論を用いてスロバキアの高等教育機関に関する新種の情報が得られた。- 技術的仕組（モバイルコンピューター方式）に関する適切な意思決定など、組織面・技術面での運営が成功裏に進んだことから、円滑な実施につながった。	<ul style="list-style-type: none">- 革新的な活動に対する高等教育機関や学生の参加意欲を喚起することは可能であり、加えて、結果に関する情報を入手して他大学と比較できるようにするとの提示を行うと参加を得やすい。- この種のプロジェクトを成功させるには、人々の熱意やプロ意識、十分な財源、リスクを負う意欲、センターの支援など、複数の要因の相乗効果が必要である。- 原則として、外国の高等教育機関の外部・内部比較を入手できる。

主なメッセージ - スロバキアのような小さな国では、専門知識が豊富な安定的チームが運営する形でモバイルコンピューター施設を運用すると、テストの実施面を簡素化でき、現地の事情への依存度を引き下げられ、現地的な悪影響を排除し、技術の信頼性と円滑な実施が強化される。

AHELO フィージビリティ・スタディ報告書 第2巻

米国

米国

経済学

工学

一般的技能

3つの州、教育機関 11 校にとって AHELO への参加は、高等教育のマーケットのグローバル化が進行する中で、参画・情報交換を介して、既存の学習成果の評価制度を強化していく絶好の機会となった。

主な課題	主な成果	主な教訓
<ul style="list-style-type: none"> - アメリカの高等教育は規模が大きく多様であり、その運営も分権的であり、ガバナンス、認定、質保証は教育機関を重視したシステムになっている。 - 教育機関レベルにおいて、相互に競争する評価目的・属性の対応、短いスケジュールにて忙しい上級年次の学生の参加意欲喚起 - 基本ファイルの書類整備をせずに返納した国内データファイルや教育機関のデータファイルの解釈、その上で、各州や教育機関にとって有意義なデータ分析 	<ul style="list-style-type: none"> - 教育機関、教員、政府、民間、慈善団体といった関係者の間で、AHELO 参加に関して十分な関心、理解、支援が得られた。 - 多数の国際的、国内的、教育機関の提携先と共同で作業する場合の複雑さや不確実性について、最低限の指導と支援で問題を克服できた。 - 予算が不確実で策定作業も遅れプロジェクトの内容も修正されたにもかかわらず、関係者相互間で関心を得られ参画してもらえた。 	<ul style="list-style-type: none"> - 信頼される存在になるとともに、広く受け容れられるためには、国際的な評価枠組は、可能な限り公平で文脈に左右されない質問票を用いて、当初から明確かつ書類整備が行われていなければならない。 - 最終的に実施可能になるが、高等教育における国際的な学習評価の企画立案、運用、使用を行うには、調整面や運営面に特に配慮する必要がある。 - 広い範囲で見て参加者や関係者から見た場合の価値ある提案、国際的な高等教育の学習評価は、明確化を行う必要があるとともに、効果的な形で重点を絞る必要がある。

第9章からの結論（文責は専門諮問グループ座長の Peter T. Ewell）

本件フィージビリティ・スタディに関する専門諮問グループの全体的評価

専門諮問グループ（TAG）の見解としては、AHELO フィージビリティ・スタディは高等教育レベルにおいて過去に例がない国際的なデータ収集事業であったと認識している。記述式の自由回答式の設問と選択式設問の双方で構成される評価用質問票を用いて、学生の学習成果に関するデータが17ヶ国、3分野にて収集された。また、学生、教員、IC（教育機関調整担当者）、NPM（国内プロジェクトマネジャー）が記入する形式の調査によって、各種状況要因に関するデータも収集された。

翻訳作業、状況説明、サンプル採取、電子的なテスト運営、自由回答式設問の採点、データのクリーニング、統計分析、報告など、各種の実施上の課題は、対応策が講じられており、きちんと克服されている。確かに、一部の国・体制の中には、困難の度合いが強かったところもあり、そのため、成功のレベルにも差が見られる。

にもかかわらず、参加国からは、経験から学んだものがあるとの回答が共通して寄せられており、同じような取組を再び実施するという声が大半であった。これと同じように重要な点として、本件フィージビリティ・スタディによって、高等教育レベルにおける学生の学習内容について幅広い事柄が判明するとともに、今後の実施方法に関する教訓も数多く明らかになっている。

その上で、専門諮問グループとしては、AHELO フィージビリティ・スタディにおいて特に成功を収めた事柄と、それほどうまくいかなかった事柄を簡潔に指摘したい。その中には、本報告書で既に触れているものもあり、AHELOの本調査に向けた教訓になっているものが大半である。

特に成功した事柄

専門諮問グループでは、下記の諸点が本件フィージビリティ・スタディの長所であると考ええる。

評価の運営

世界的規模で、また、複数の言語・地域にまたがる形で評価を電子的に実施したことで、本件フィージビリティ・スタディでは大きな課題に直面した。この課題への対応は素晴らしいものであった。極めて多数の教育機関でテストが行われた際、実施面で生じた大きな失敗は、わずか1回のみだった。このような成果を支えていた技術インフラ、教育機関調整担当者（IC）向けの徹底的な研修体制、厳格な実施手順が設けられていたことは、すべて賞賛に値する。

データ分析の技術的側面

本件フィージビリティ・スタディのデータ生成は、膨大かつ複雑なものであった。なぜなら、6種類の異なる質問票がそれぞれ種類の異なる回答者に用いられたためである。このような事態にもかかわらず、健全な分析を行おうとする当コンソーシアムの努力は、技術的観点から模範的なものであった。分析計画の内容は健全であり、用いられた統計技法は適切なものできちんと運用されていた。また、分析に関する問題（例、データの欠落、機能が不調のときなど）に直面した際には、適切で効果的な対策が講じられた。

専用の質問票の設問構造

本件フィージビリティ・スタディ専用に設けられた質問票は、工学と経済学の選択回答式設問と自由回答式設問、状況調査を含んだ3種類の調査を含め、模範的な内容であり専門的水準も高かった。適切で有益な評価枠組を基にして策定されたものであり、（工学と経済学の場合には）博識な有識者から情報を受けて、（状況調査の場合）多大の労力をかけて設けられたものである。さらに、この種の質問票は、ほとんど手直しを要せずに作成されており、専門的観点から高い水準になるように起案されたものであり、試験的に導入されるとともに、短いスケジュールの中で起案されるものだった。

全体的な調整

AHELO フィージビリティ・スタディと同程度に複雑な事業を運営・調整していくとき、5大陸、17種類の文化・政治風土、時間帯も多数存在する中で、手順の一貫性を確保するという深刻な課題が発生した。コンソーシアムによって設けられた運用の仕組みは、明確な指示が示されており混乱を最小限に抑えられているため、これらの課題に対応できている。不可避の問題が発生した場合、その大半は、短時間でスムーズに解決されている。

うまく機能しなかった事柄

同時に、専門諮問グループとしては、本件フィージビリティ・スタディ要素の中には、うまく機能しなかったものも一部存在すると考えている。その結果、AHELO本調査に関する当グループの提言にも反映されているが、本件事業を推進するにあたり、特に検討しなければならない事項である。

リソースと時間

専門諮問グループとしては、本件フィージビリティ・スタディの過程において、財源が極めて少なく実施スケジュールも過渡に極めて短いものであった旨、繰り返し指摘している。リソースと時間をもっと潤沢に投入していれば、新規作成の質問票に関して認識を踏まえた聞き取り調査や試験的導入を行ったり、実施や採点の仕組みを本格的に現場にて試験的

要旨

に実施したり、得られた結果の結果報告や集団討論に手厚く時間を割いたりするなど、重要な側面も実現できたと思われる。

自由回答式設問の難易度と意味把握

工学と経済学の評価で用いられた自由回答式の設問は、専門的観点から見て質が高いものであったが、その難易度が高すぎたため効果的に解いて好成績は得られなかった。同時に、CLAに基づいた一般的技能の自由回答式設問は、国際的な文脈からすると、必要以上に「アメリカ式」だったことが明らかになっている。上記のように、試験的实施や現場試行の時間枠が拡充されれば、初期段階でこのような事態が判明し、是正のための時間的猶予が生じる可能性もある。

結果の報告

専門諮問グループの見解としては、本件フィージビリティ・スタディから得られた膨大なデータについてコンソーシアム側の分析内容は技術的観点から模範的なものであったが、同コンソーシアムの最終報告書を通じた結果発表は、過渡に複雑であったため、理解しにくいものであった。最も重要な点は、この報告では、将来に向けた政策判断の基になる明確な結論が欠落していることである。この場合も、その一因として時間的制約があったことが考えられ、結果公表後に関係者から感想なりフィードバックがあれば、報告プロセスにプラスに作用したと思われる。この点に関して、2013年3月の会合が役立つはずである。

契約上の取り決め

AHELO フィージビリティ・スタディは、OECD 事務局と元請業者 2 団体 (ACER、CAE) との個別契約で開始された。このような独立した契約関係であることから、請負業者相互間の連絡体制が脆弱であり、活動内容が重複してしまうこともある。さらに、一般的技能項目の質問票の調達・策定では、入札手続を経ていないが、このような事態はこの種の国際的調査では極めて稀なケースである。契約上の取り決めを再構築してコンソーシアムの下で CAE を ACER の下請業者にすることで事態の対処が行われるまで、独立の習慣と商売敵同志という事情の相乗効果により、両社間における協力関係の構築が困難であった。

その他に得られた教訓

最終的に、専門諮問グループの見解を述べれば、AHELO フィージビリティ・スタディによって、この規模で国際的な評価事業を行う場合に、推し進めるべき教訓がいくつか得られた。その内容は下記のとおりである。

- ・ 評価の設計や評価結果の分析に際して関係者が参加できる機会を拡充すべきである。本件フィージビリティ・スタディにおいては、参加者の知恵や国内・国際レベルの知見を

集めて改善に役立てた方がよいと思われる点が多数存在していた。質問票や実施手順を明確化する取組を見ると、賞賛に値するものが多く、その大半は成功を収めているが、協力姿勢を強化していくと、さらに大きなプラス効果が生み出されると思われる。

- ・ **質問票と実施制度の本格的な試験導入を行うと、「設計・建設」プロセスに関係者が参加できるようになり、この種の設計内容を試験的实施できると同時に、その改善過程における関係者の参画を強化できる。**これが特に当てはまるのは、結果を報告して各国や教育機関とデータを共有する場合である。国内プロジェクトマネジャーや教育機関調整担当者の場合、本件調査で得られた情報を必要としているにもかかわらず、その点に関して配慮が欠如していることに落胆している者も多い。特に、国別のデータファイルが提供されるときに、分析に必要な書類整備が行われていない状態のときに、その傾向が顕著である。
- ・ **この種の調査の場合、学生の学習成果を検討したり学習を支援する政策・実務を検討する際に、適切な場所を選定し国際的学術団体と一体的に行う必要がある。**AHELO の実施理由の部分でも指摘したように、ここ 10 年間で、高等教育における学術成績を改善していくことに政策上の関心や学者の関心が大幅に強くなっている。このことについては、ボローニャ宣言、「Tuning in Europe」、スペリングス委員会、米国における認定への関心、各国における資格枠組の台頭、U マップや U マルチランクといった国際的なマッピングやランキング活動の出現から見て取れる。AHELO は、質に関する学術的対話や政策対話の内容を調整していく好機である。
- ・ **このようなことを行うには、時間とリソースの投入量を増やさなければならない。**この点に関する専門諮問グループの結論は以前と変わっておらず、所要のリソースや必要なスケジュールを確保できない場合、この種の調査は、今後、実施すべきではない。

結局のところ、専門諮問グループの見解を述べれば、AHELO フィージビリティ・スタディが健全な形で実施され、今後、継続的に国際的評価の特徴となる教訓を数多く得られたということである。本件調査に対する貢献の中で最も重要なものとしては、状況を問わず実施内容や採点作業の一貫性を確保すべきという提言、(特に、本件調査の開始時に) 状況関連データのニーズについて着実に補強を行うべきという提言、一般的技能における選択回答式設問を復活させるべきという提言、最終報告書の作成方法に関する OECD 事務局への提言が挙げられる。専門諮問グループの委員の場合、本件調査への参加を介してなにかの重要性を全員が学習しており、取組が成功裏に進められたことについてコンソーシアムと OECD 事務局に対して祝意を申し上げたい。